



座光寺 恒川・清水[1]

2016.12
No.22
恒川・清水①

座光寺エリア
恒川・清水
世帯数: 恒川 90・清水 44
(H28.12.1現在)

麻績の里

座光寺便 恒川・清水①号 平成28年12月発行 ■ 麻績の里ふるさと応援俱楽部(飯田市役所座光寺自治振興センター内) 長野県飯田市座光寺25535 TEL 0265-22-1401

両地区には恒川(ごんがわ)と清水(しみず)は、次ページの地図を見ると、ちょうど凹凸のようにな接しています。

江戸時代の五人組では、両地区は「田中」「恒川」「池田」に分かれています。幕末の銘々帳によると、戸数はそれぞれ16戸、11戸、18戸となっています。戦前の昭和16年ころ「恒川・清水」で一本化されました。その後恒川と清水に分かれて現在に至っています。

両地区には恒川(ごんがわ)遺跡群が広い範囲に散在し、今後は公園化計画も進んでいます。歴史的にも現在も結びつきの深い恒川と清水を、今回と次号の2回にわって一緒に取り上げます。



恒川・清水近くの国道バイパス

南本城の遊歩道が新たに生まれ変わりました。

2000年浪漫の郷
南本城保存活用PJ

前回の「座光寺便からのお知らせ」でもお伝えしたように、座光寺地域自治会では、遊歩道の階段や崩落部の整備に利用する間伐材の運び出しや、下草刈り、皮むき作業などの下準備を行ない、整備を進めてきました。

11月13日、山中に放置されている間伐材を山の外へ運び出す山作業を財産区に協力して行いました。これは一昨年、南本城の間伐を実施した際に出た間伐材であり、そのまま放置していくと、今後の管理作業に支障をきたし、景観にも悪影響を与えます。

南本城の間伐材を活用した遊歩道の丸太階段や崩落部の整備が完了しました。長野県内有数の城跡である南本城の新しい遊歩道をゆっくり歩いてみてください。座光寺の魅力にあふれ

た自然だけではなく、古の浪漫にも触れる事ができるはずです。大勢の皆さんのお越しをお待ちしています。

これらの事業は県の地域発元気づくり支援金を活用の補助金を活用し、長野県の史跡である南本城の保存活用を目的とした「南本城保存活用プロジェクト事業の一環として行って



お正月の歓迎めに

「ふるさとパック」は、毎月の座光寺農産物の詰め合わせ、ふるさとを離れて暮らす方に、自然の香りや懐かしい味をお届けしています。

**ふるさとパック
秋から冬の味覚満載便
2,000円(送料別)**

- お申し込み先 座光寺自治振興センター内
麻績の里ふるさと応援俱楽部
(TEL.0265-22-1401・FAX.0265-22-1475)
E-mail:zakouji@city.iida.nagano.jp
- お申し込み締切 平成29年1月20日
- お届け時期 平成29年2月上旬
- ※代金は商品到着後にお支払いください。



恒川清水今昔
古来、人は水のあるところに定住しました。恒川清水は恒川と清水両地区のほぼ中央にあり、恒川遺跡群の中心部にもあたります。古代から水が湧き出し集落形成の源となつた大切な場所です。

三六災害(昭和三十六年)前の恒川清水は、水量も多く底が見えるほどきれいな水が湧き出していました。清水の周囲には常に人が集い、暮らしに欠かせない重要な役割を果していました。

豊富な水は恒川、清水、欠野一帯の水田を潤す、農業用水として利用されていました。家庭の主婦にとっては洗濯など水仕事の場であり、また世間話に興じる井戸端会議の場でもありました。初冬の漬物の時期には中市場や高岡からも、荷車に蕪菜をいっぱい積んで菜を洗いに多くの人が來たといいます。養鯉業の人々が鯉を一晩さらすのにも利用されました。

池の周りの石をよく見ると、ポットホールのようないぬいの穴がいくつも目にとまります。これは子どもたちが石を少しづつ叩いて穴を開けていた遊びの名残です。

ポットホール
人々が集う場となつていた恒川清水。いつの日か、そんな恒川清水が戻ってきてほしいと思います。



ポットホール

恒川清水今昔
古来、人は水のあるところに定住しました。恒川清水は恒川と清水両地区のほぼ中央にあり、恒川遺跡群の中心部にもあたります。古代から水が湧き出し集落形成の源となつた大切な場所です。

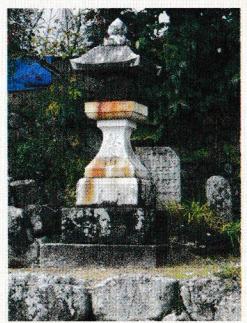
三六災害(昭和三十六年)前の恒川清水は、水量も多く底が見えるほどきれいな水が湧き出していました。清水の周囲には常に人が集い、暮らしに欠かせない重要な役割を果していました。

豊富な水は恒川、清水、欠野一帯の水田を潤す、農業用水として利用されていました。家庭の主婦にとっては洗濯など水仕事の場であり、また世間話に興じる井戸端会議の場でもありました。初冬の漬物の時期には中市場や高岡からも、荷車に蕪菜をいっぱい積んで菜を洗いに多くの人が來たといいます。養鯉業の人々が鯉を一晩さらすのにも利用されました。

池の周りの石をよく見ると、ポットホールのようないぬいの穴がいくつも目にとまります。これは子どもたちが石を少しづつ叩いて穴を開けていた遊びの名残です。



■ 秋葉塔
(常夜灯)
恒川清水の秋葉塔は、江戸時代に地域の人々の淨財で建立されたものです。以来昭和20年代まで、毎夜常夜灯に火が灯されてきました。



秋葉塔(常夜灯)

恒川と清水で毎年3月、神事を執り行っています。
■ 秋葉講
旧3区(欠野、中市場、恒川、清水、高岡、河原)では、現在も秋葉講が行われています。かつては恒川・清水の会所に役員が集まり、籠で代参を決め、遠州秋葉山まで出向いていました。今はもちろんわりで行われています。

現在に残る史跡に、人々の信仰の名残を見ることができます。

恒川清水(ごんがしみず)周辺は縄文時代(約8千年前)から人々の定住があり、奈良・平安時代には伊那郡衙(伊那郡の役所)の祭祀の場に使われていました。

恒川清水(ごんがしみず)周辺は縄文時代(約8千年前)から人々の定住があり、奈良・平安時代には伊那郡衙(伊那郡の役所)の祭祀の場に使われていました。

現在に残る史跡に、人々の信仰の名残を見ることができます。

恒川清水(ごんがしみず)周辺は縄文時代(約8千年前)から人々の定住があり、奈良・平安時代には伊那郡衙(伊那郡の役所)の祭祀の場に使われていました。

昭和40年代から桑に代わって桃の栽培が盛んになり、その後梨や柿へと変化してきました。国道のバイパス開通は景観を一新しただけでなく、土器や木製品が出土し、伊那郡衙(ぐんが)の遺構発掘が本格化しました。

バイパス周辺に商店が集積し、賑わいをみせる恒川・清水地区ですが、戦前から戦後しばらくは桑畑におおわれた農村でした。『座光寺村史』には、昭和35年に座光寺全体で組合員数99戸、飼育頭数132頭と載っています。集乳所も三共、万才、原、共和の4箇所に設けられています。

養蚕から果樹栽培への移行期、昭和30年代には酪農が盛んになりました。『座光寺村史』には、昭和35年に座光寺全体で組合員数99戸、飼育頭数132頭と載っています。集乳所も三共、万才、原、共和の4箇所に設けられています。

歩けば!が見えてくる 座光寺19地区探訪⑩ 恒川・清水[1]

祭事・史跡探訪



石造文化財が並ぶ恒川清水

十王堂

恒川・清水の変貌